

焼き物の歴史を変えたまぼろしの窯

渥美窯

私の住んでいる渥美には、いたるところにガンザラ（山茶碗）がごろごろしていた。畑の開墾ではいちばんの邪魔物とされるしろものだった。遊び場だった小松林の原にも散乱していたし、ちよつとした藪の低みにも積まれていた。そんな子供の頃、祖父が開墾しているのを手伝いに行つて、片隅の黒い土のなかにガンザラが重つているのを見付け、たんねんに掘つて完全なものを四枚取り上げた。ごつごつしてゆがんだものだったが、うれしかった。私が山茶碗を掘つた最初であった。

『日本陶磁全集』の「渥美窯の調査」

（昭和52年）小野田勝一



渥美窯の「黒い壺」たち

渥美の壺を「黒い壺」と命名した陶磁研究家本多静雄氏の収集品。写真中央の壺の肩には独特の蓮弁文（蓮の葉の模様）が刻まれている。本多氏は、渥美窯を世に送り出した立役者。（豊田市民芸館蔵）

▶文化財課 ☎ 23局3635

野山に転がる焼き物



野山に転がる焼き物
野山に転がる碗の失敗作。耕地整理が行われる以前は、いたるところで見られた。山の中に転がる姿から、「山茶碗」と呼ばれている。（高松町にて）

渥美窯の研究家（元田原市文化財保護審議会会長）

の故小野田勝一さんは、渥美窯への関心が薄かった時代（昭和初期）に、野山に焼き物が転がっている様子を『日本陶磁全集』に書き記しています。

その後、「畑の邪魔物」だったものが、日本の陶芸史、考古学に大きな反響を及ぼすとは、少年時代の小野田さんも想像できなかつたでしょう。